高松塚古墳

# 飛鳥美人の魅力

# 古代の美 衝撃カラー

## 口紅、衣装鮮やか 社会現象に

「カラー壁画を発掘」「豊かな頬、口に口紅」。高松塚古墳壁画の発見を伝える1972年3月27日の朝刊各紙はそんな見出しとともに、西壁女子群像の写真を大きく掲載した。

### 最も有名な絵画

「遺跡記事が初めてカラーで紹介され、新聞の切り抜きを応接間に飾る人すらいた。学術的な価値は四神図などの方が上だが、考古学に一般の人が興味を持つきっかけになった」と河上邦彦・神戸山手大教授は振り返る。

その発見は「衝撃的」という言葉に尽きる。古代史ブームを巻き起こし、社会現象となった。西壁女子群像は、日本で最も有名な絵画の一つとなった。

「雅で、とても美しい。最古の美人画ですよ。今見ても感動的です」

こう語るのは、作家の立松和平さん。飛鳥時代を舞台にした小説「救世 聖徳太子御口伝」を書いた際、当時の風俗を再現するのに頭を悩ませた頭に浮かんだのは、高松塚の女子群像だった。

「埴輪や土偶はモノトーンで、抽象化されている。そこに極彩色の女子群像が現れた。生き生きとして今にも動き出しそうです。具体的な女性の姿を想像できる。古代が現代につながった」

一方、「美人論」を著した井上章一・国際日本文化研究センター教授は「現実の美人かどうかわからないのに、ネーミングに訴求力があり、社会の共感を呼んだ。『美男』ではなく『美人』にこそ値打ちがある。ちょっと情けない『おっさん文化』だけど」と言う。

### 初の遺跡記念切手

発見から1年後、寄付金付き切手3種類が発売された。遺跡が記念切手になるのは初めて。発行枚数は、寄付金付きとしては異例の計1億2050万枚。寄付金は6億6200万円に上った。切手の博物館（東京都豊島区）の内藤陽介副館長は「どの家庭にも飛鳥美人の切手があった。切手ブームのピークを導き、高松塚のイメージ定着にも大きな役割を果たした」と指摘する。

壁画発見により、明日香村の人々の暮らしは一変する。1980年、村の歴史的風土を守るため、明日香法が施行。村の開発が厳しく制限される代わりに村民の暮らしを支援する。「平成の大合併」の流れに反して、周辺6市町との合併協議会から離脱した村の選択は、その延長線上にある。関義清村長は「高松塚壁画の発見によって明日香の大切さが全国民に認知され、村民の意識が変わり、誇りにもなった」と語る。

高松塚古墳の極彩色壁画、とりわけ飛鳥美人が、考古学という学問だけではなく、社会全体に大きな影響を与えたことは間違いない。数多い文化財の中でもそんな絵画は日本にかつてなく、その後も現れていない。その姿を100年後、200年後に伝える。飛鳥美人が未来に生き続けることによってのみ、石室解体という〈最後の手段〉は、報われるはずだ。

西壁女子群像の寄付金付き記念切手

### 高松塚古墳関連年表

| | |
|---|---|
| 1972年3月 | 極彩色壁画発見 |
| 73年3月 | 壁画の記念切手を発売 |
| 4月 | 古墳全体を特別史跡指定 |
| 74年4月 | 壁画を国宝指定 |
| 75年3月 | 飛鳥資料館開館 |
| 76年3月 | 保存施設が完成 |
| 77年3月 | 高松塚壁画館が完成 |
| 79年12月 | 昭和天皇が視察 |
| 80年5月 | 明日香法が施行 |
| 2000年2月 | 同法10年延長が決定 |
| 03年3月 | 文化庁が黒カビ発生を公表 |
| 8月 | 明日香村が合併協議会離脱を表明 |
| 04年6月 | 壁画の劣化が判明 |
| 05年6月 | 石室解体を決定 |
| 07年4月 | 石室解体が始まる |

## 唐の影響受けつつ独自性

百橋 明穂
神戸大教授（美術史）

高松塚古墳が築かれた時代はどういう時代であったかを知ることは、飛鳥美人の絵画史的意味を考える上で重要である。特に日本の古代史における海外交流の一端として考察する必要がある。当時の国際情勢が大きく作用している。

高松塚が築かれる約半世紀前の660年、大陸文化の窓口であり、密接な同盟関係にあった百済が、唐と新羅の征討を受けて滅亡した。百済復興を目指した日本と百済の連合軍は663年、白村江において、唐と新羅の連合軍に惨敗を喫し、多くの百済遺民が日本に来朝した。さらに、日本との外交関係を緊密にしつつあった高句麗も、唐と新羅の征討を受けて668年に滅亡した。すなわち日本は朝鮮半島での足がかりをすべて失ったわけである。

それゆえか、665年、667年、669年と、戦後処理を含めて矢継ぎ早に遣唐使を派遣している。日本の古代文化が、百済、高句麗文化から唐朝文化へ、移行したことが、飛鳥美人誕生の契機である。

### 飛鳥美人の歴史的意義

それ以後、遣唐使は約30年間派遣されることはなかったが、天武朝では多くの政治制度を唐朝に倣って改革し、なかでも唐風の服装を規範とした服装令が施行された点に注目してよい。文武朝では、正月の朝賀の儀において四神の旗を立てるなど、唐朝文化の摂取に急激に傾斜していく様がうかがえる。

中国陝西省の永泰公主墓に描かれた女侍図

太宗、高宗、そして則天武后の統治した初唐時代の絵画は、大規模な陵墓壁画に見ることができる。シルクロードにも通ずる広大な領土と多民族国家としての初唐文化は、国際色豊かな現実謳歌の世界を描いていた。地下の陵墓の壁には生前の活気あふれる生活を再現するかのような伸びやかな男女群像がたむろし、また多くの文武官がかいずく晴れやかな儀仗が繰り広げられる。

706年に造営された永泰公主墓や章懐太子墓、懿徳太子墓などの壁画は、写実性と動感表現において、まさに初唐絵画の頂点に位置する。

飛鳥美人図は、それら東アジアに普及した唐朝文化の東端に位置するささやかな一例に過ぎない。しかし重要なことは、飛鳥美人は決して唐朝宮廷の美女たちではないことだ。

現実の男女群像を写実的に描くという形式や構図は、確かに唐朝陵墓壁画に範をとっているが、高松塚の男女群像は、それらのコピーではない。紛れもなく日本の白鳳時代から奈良時代の宮廷の男女群像である。日本における風俗画としての嚆矢でもあり、古代絵画の水準の高さを証明してくれた素晴らしい作品なのである。